盥觴無底杯

よと笛

特別
へ12
1077
38

帝國圖書館藏
利
1.077
3938

へ12
1077
38

横笛

四十九歳　薫君二条

二月柏木権大納言一周忌六条院御誦経給事

朱雀院献箏琴　光源氏見給事　光源氏見宮御琴給事

若君御箏給事

秋大将御一条宮給事

御息所御対面事

大將引和琴給事
女之宮引筝給事
賜物給事
大將帰我殿覆尺衣御門渡事
給事
大將若君魂吐母君服立給事
大將為東門渡御經路宣旨事
大將奉六条院給事
之宮之うちとりうの文と
はしの之案内をうけ給はり紫上に
此方のうの御事
大將女抱之文奉女御方給ふ
大將奉見若君思出東門渡事
大將奉六条院給ふ一条文給事
文給ふ給若君事

撰節　巻名　以哥　秘詞ニハ此節トヨリ有

よと節乃ことゝ哥ニてうゝねと

むすゝ　病　ほてそつくせる

元　源氏ハ十九象時ハ二歳

秘　源氏軍九月二月中ハ事ハ撰

巻ハ軍八月乃秋中ハの事

蓋二象自文ニ象ハうとゝ弁

義　撰節者此節也　知てふこゝ

ふゝとゝの篇　幸　幸者ハ也

常に節うち接し仏ありて
節（関）い薄（テキ）せ（スカスノゾクノスグ）悪氣と薄く仏し

故接大黒言うるうるせ行み
ありしさと
柏（和）木蔓すう事前巻よ尺て多り
柏（関）木羅に接とうもう　故に
明国ヵ偽うう出うう山うう成う
ありうしうう一て動く
大黒（筆）云うり限りて接皮う正宗鎗の
宗い接正義別ありう
大ありうよつもうてうに

秘 源い大うるれ人とそ人あり〳〵くるほ
く志すの出たるようまして梅木の
事ハ一しかるあるあり〳〵あるし
いうなりやあり〳〵いろる
秘 女之文れ出事し
義 女之れ事一つこそそすしてあ主源
うるの色〳〵しる天下乃あめとそ
色多〳〵ある
求 大義者不陸小殿

出てそうして
秘 今年二月一同志ろう
花 去年の二月来門猪辛去今年一同
志し六条院今浜御絵絵
ようれも志ろうとうろう
秘 董二条し
出たのうちうるの色さ行て
秘 うるの色し
義図行 董れるよ梅木れ巡芸を別る

せうあせ

こうの百ぬとうん

李部王記天慶十年三月十九日御八

講結願　太皇大后御桐殿
設法事八講

叙八千時ノ講也　余波親鋪　調布百端

南侍所金百両　納瑠璃壺一口小講年

義年見行海

おもくいとうあるもとてそ

文おもくいとうあるもとてそ

とうあるもとて

大切君も

義ノ者しとうあるもとて

一条北文とも

為業北文しノ者北殿人とうあるも

とうあるもの君とうあるも

おとうとうとも

秘おもくいとうあるもとて

私政仕い源北下仏

とうあるもとて

紅梅大臣以下也

うくい義業文に毋うくし
秘伝大原問くしかた也
私業に義云ふ一条文に事よ
うくして相承のうくとり書乃ふ
いまのふくと父母の感ぜしと
うくに沢みも世にありえ
なくとあるとみも相承におりえとも
くして父母のおりひいよ
つくとや

山にみくとい二文もうく
朱雀院にれんし二文い義業の
入道に文も
女三乃文も
世とおりうくやまと
朱雀院の後世にてあくちうくを
おりし
おるしみちくとて
女三も尼よりうの人くと 義業

同蓮とのゝ事しきりに
おもひ出られけるゝ事たとへ
義女之家女にてをはしまし、時代
かゝるの山里にひきこもり行
おもしろ今い世をとそもしさたまへ
ゝ

遊筝来抽鳴風琴　盤根徙蹠鄙龍文　朗詠

尋泉上山邊　看筝出林遲　白氏文集

大宮日記曰　延長六年亭子院ゝ
ゝてまつれ給ふ御使
ゝ物ゝい行ゝの大ゝきのゝ
ゝてゝゝ世ゝ行ゝ

花山院御製

世中ゝ
ゝゝ

冷泉院御製

年ゝ

子ゐまとるしうきんとそそふ
山かりまはとこゐ
春りのよ海うらけるはきそくし
て侍ける女ところの野へわけ侍り
ある女をとふてうふうさきすなとと云ひ
それて歌花詠るみめとらくかれハ
賀朝法師　延長定額御導師
春乃野にところもとむといふなるは
ふたりぬるはかりみえたるや君

返し　よみ人しらす
春の歌にあるしこれとあまたゐか
よに不世に人乃またあめりけりハ
そうけり
秘　此ふそのもしにさきおのゑかり弁
春の歌やまさそ霞もとしくしそを
弁　さ御の来より筆もろくさん
未詳　世をとうれへうんあはそく御とも
同しとこゐをとそもともゆう娘ん

秘
女房いとけなくして母とともに雪山に
行ぬるに山路なほ遠しとて
後世菩提の為とて
みづからとともに同じ所に
菩提
并
入ぬ道に六道父子別の為
なり一切極楽の事
義
世とともれば世と共に今生の
為なれば
とくまもなく共に
とくまもなく同じ所に
ともなりて一仏土に生れ
恩愛なほ深ければ
ともに同じ所に生れ
ともに事に仏土に
ゆく
地蔵本願経云父子至親後路別縱然相
逢無有代受

秘
河海に地蔵本願経をひきたり
これハ只佛乃札難解雑人の心しい
さかのゝ札納し　弁
箋
あまもうれて候とよひのくてるゐ
らいしともを　弁　和秘ニアリ
河
罍子　又櫑子　和名　罍子　同上
罍　音雷 又作鐳　正　罍　杯仙客
まきつきたるもろこそよふねりかけ
のふさとあふのもてる座するもの

とさふちとあるし内ハ朱漆
ぬりくろぬり　螺鈿掛子也　菓子をと
入らるゝ也　内蔵寮之納之待り金
罍とあるハ酒器としいと刻之札
記り山罍其札壺容一斛刻而
書之雲雷之形也
一
韓詩云　天子以玉飾諸侯大夫皆以黄
金士以梓是木ハ皆器也然而我朝撰人形
秘
菓子を入ぬれハ河海にみえたり

箋
疊子やしる海に有 みのらしよ水スミ
又ハ札紙懸紙と云
あふ事はその
箋
不及ノ斎
秘
朱雀院の御ふミの詞まへよ甚北山わ
みすミも無くしてくれいとある
いそしうさし
わすし前の流ともをひ
女三とてもとにある流斎の儀にし（おて）

こしかとそふれと
箋
前の斎佛法ようけうさとくぬさ
せんとそうしかけかと
秘
ひしかとうちそれとおもしろさ
詞とし
これさへなつかしのはさゆかり
源の之候しとつゝかしと流候て
朱雀院のいよいよ女三をたまりたる
らんとおもふす候し 甚だよ同

所の法文なとにもあるへしとし

うたゝ人のよみ哥

秘
かくさ語のすへてうきそことあひのすへ

義
うきそこにすひてうきみをしのへると

やさすけまはさ法之へしいふそれ

かんしゅしき

花
入道三品法名ハ釈阿也しのふる

あるも院源の法名すると

うき世よいおもはぬところなゆしくそ

そもく山の奥もといひてそいれ

河拾
世中よみちこそなけれおもひいる

とし山うるからうくさん

并 秘 義 皆用此許

義
米?此おもふすひのすむ山の奥へもと

法許とも皆両日とく

しろめくてうは法まてしきに

義
此云全体ハとうさとのすみかいかに

となり

十

ばかりなれば一ぢうとあれば家
六条院とて
尼のすがた　光源氏の心中思ひやるべし
いとまもとりもあへず
女三の宮よりうのみとこの柏の事と
ゆゑよしありまし
ばかりこそなれば
尼すがた
女三の宮の尼よりは源氏の事と
源のあるべきことをひるまして
ものしたまふとてよりけるとて
女の宮のすがたにてはなほうたがひて
後い一ぢうはてはてはてはてはの
ものしたまふとてはいかにもあれば
さうもの
尼よりはなほうたがひてきこえ
ものしたまふとてこれいかなる事ぞ
まことにこれとてねるものを

秘 蓋也

秘 源の神し

秘 唐小紋也

秘 唐小紋こそ

一説 下紋

秘 ちらすも

秘 ちらすもの

秘 おもしろきこと

義 角ぐたるさうの
柳とをつてたてる
かしらいつゆ多しかして
河 楊柳とは多くしたる鴨頭草
花とをさをさ多
よりて見るに
まさしくしらに
河 扇眉ゆひうつと称して栗和
のまさやうに

秘 栗軟れ柳や 義
いとまくしひ出らるれと
秘 源れる柳まよ似うつとをひすもを
れいとあるよ
秘 柳まや
宮ものもうてまうと
女之ゆ蓋れ似ねと
われ清れうけ
義 源の我うみとうてねとや

あるとしのくれ
かりのようにとまる海
うりのお花よりいねなとしらぬ
ひとしてあるとまりのうちのひ
てつとこうしのくれ文殿のくれて
いてまさるけしきあるとさい殿ね
そや
そひあるよあるとあるかと
源氏たりつまのすくや

かきいるこのひてて
源氏うりかとしくや
いとをしきかかる
何とゆるんなうねあるや
いとけそひとすかとそうれ
今まり一とあるくよそれしん
まりとうもかとし
女房のしかるこ
明石殿の文とたりれと

秘 明石中宮よりの御文なりし紫薄様
男かたへさとし
かの宮へおもひてなくらしき
同 柏木よ似つては好色なるらん事
とかくそのゝふし
きのしかおもひゆく末
宮よりち紫ぬるすと名とゞし
花のさかりはすぎなかりし
同 花の色に花のさかりは見てすめと

雉子ゑんとはいのちすはきわ
異 柏木思ひの人音の紫宮と吟せて
同宮からし名はうまれてそてい
帝よりのをかくしとさひすなそて
らちすきそのゝそし
おきなのされ子すこしのさうわぬ一章
まことしや
秘 紫宮 柏木巻ノ音のはしの人宮い
同宮のかゝ心から作わおひそんすと

[illegible]

秘の義は問[illegible]

[illegible]

物[illegible]

[illegible]

[illegible]

秘

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秘

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花鳥風月秘伝

花

むしの事つぐの事をとりてはやすこと
うたのおさなきもとなる言葉
この物事の事とのうたの花鳥風月
うたの物ちかけるこころかなの
しきたりしたる文句のこころ所にて
いひ事のうたうたへさんし

問

文句のことは前よりはやうたへ
ことうたうてけり文句

原

うたふ心もこころとうたふ芸所乃
つもりてうたへ

秘

梅木の事いとれたれたれたる
なりしろさうし

幸

うたふ心もこころ梅木事花ことこと
い梅木事所のとい前花

美

梅の事花ありへとも薫の香し

[illegible]

盃を 濡る入井事とひきり下墾

今[illegible]り行[illegible]ん作りるの

[illegible]

めてそうらて

筆とりるんん み草とん

秘筆とりるんみりると引とる

[illegible]

義 源のいさのとるあとるあとと

めてそうつとそし

又筆此事っても

私草の事ってそうて

そしりさりさりの

義 これていさの

とさのとんとる

月日りそうて

秘草る地

そのんりてそ

秘 源九郎一世の間ハ高徳と
のうまれつきなり
業 同果九郎ハ武道の事をとり順現業
順生業ゴ業アリ
為雲事業九郎事海身のうち
ゑ門ゑ九郎ハ
秘 源のいつまもゑひやうのゑ
九と行くしのみと
并 源も不海兵事わりとも業とも
野 奈しみ女之
事ありと
ゐまゑ行と
秘 業よりも式くよむ人給ゑるとゑ
うの文とと
秘 女之文や
おりのよりねゐうく

せひと不足なる事のなきハこれの
女主や

色みし流きゆるしかくし
秘 柿本女主家方の罷也 并
異 薫とみる時ハ柿の事なりといゆる
さなしや 又女主の上にそありふ時ハ
流とゆるしかくしとし
大路の巽ハうのしるのところ也
秘 柿本の遺言なと源へ申あかさ
あるさ

きのたし　　大かさかりハそしかるさ
ちのたえて
秋の夕の袖あかれなるに
秘 秋へうつりてけふおなし
秋の夕暮のいまるんつおてもかの柿へ
事をとりさんとおりひたるとすを
うちふし季節をとつかしなる西のし
ふくもえとり色とを
秘 楽器ともなるへし

ねまりつつ

ひさしうなりぬるかのあくるまつ

我うれとものぬるれ

夕(花)吾は我うれ殿の雲井殿の殿り

ぬるともありさとのすて

夕(秋)吾は之楽之の事哉

すとぬりてのすなる

夕(月)集 百葉 階里

しは祭之りさ哉と

藤原利基朝臣右近中将にて

ぬけり書同は月まりて後人も

すまれなりけり秋ぬけて物ち

まりてさけるつるそよ人まとれい

りとあるうしせんさいもいと三けく

あまてりけりとてとくし世と

よとてりそれいむりとありひ

りてまある 春有朋

我(古)うく一村落むしの移さけき

秘
拾遺巻より一条天皇とそうしのよ
おく一もの所もものりしける
ところうて出の桜そうへ有
ありひゆるとあり引手会て
見るへきん
業
拾遺巻より出の桜そうん秋とうさ
ある来と会てこそ見ぬ人へ
うてれうとあうこうり面白し

つらう出さうられて
秘
秋の出さうへ有りよりうり律を
女よりたう舞
かうるおうてうる
弁
つつのお張り 付新有り
秘
少言れてうこと 秘 拾遺巻実注する所
とうてう
花見のつうり
花
おうれいとうて桜そうる桜をは

梅木のひさ枝をうつしてこの梅
は（秘）ぶ笠い梅木に平生せしてうつし
ぶりしとし
（異）梅木和琴の上手
こ乃ほとりもこ乃りて作し
女（秘）二に家の出たるの若ものそ梅木の
名ぶいこりまを作りしと（并）
このとき三えん
一（花）条にうやとて有にいつく女二家の

此事とのぶりて
（秘）出息所の初　并　初若とさいの子
母申りして史書のあり乃ひり等
いかりひさの乃ぶ事ともも
なりとも
（河原院）うつくしい若つれもせたるのそたち
しかりにてめしつかひけり
昔伯牙鐘子期といひて二人の
琴に好あり子期死て

後今いまこの所にまれいよ
しかしとて伯父絵と縁てひ
うさうしとも
院の御まへにて
朱雀院の御前にその事
秘女二人ものいとうくしきをと
さしとも
紫式部
朱雀院も女三の宮に中まろ女
二人ものとうしとはさこめ
ろうとはいとうくしきのくの宮より絵ら絵
私事秘関おこいくの宮ものなし
やうはけりある
ようさつまとうしやうよ
侍従
藤中納言
世のうさつまとひさこ
秘
引歌古人を用事義は歌字い
和歌うとひうとも
とひいろふつまとなとく

ゆらくしのようにとし女二ゑ事百事
如は死者其吟出して事よられ
てあられと催とあるれそれ
百女二ゑ九れ九とくうりてゆ
秘の義は同しあさらみれかさう
ゆいは一条ゑ乃あまるゆさ海よ
うけてうう
いとうとうの
秘
ケ音九羽

かさうりうにあるとと
いうて世界うくさ
伊勢大
ひ俗てあい只はさまり奥
意しさのかさうりうにある世うり世
つうさと与るそうけうさまり
こひしさのしはうさと与るそな
けうさうさまり辛日
かさうりもうさあるひとし ケ音の
九り二あり極まとうみ九みく

さこそあれ女こゝろとよく思ひたりける 弄
細川云 年頃て琵琶はおりけれはまし 玄
年の拍のうつれはうれはからりまし
ねうつれは三たへんするめいそとや
琵琶の詞下には蔭善をとおもひ心得
とよるし侍り
花 琵琶の心さきのうたととをしゅ持退
それ打けるとも
花 流泉啄木の詞

よまてこの殊ともやと
秘 御息所の琵琶よしきのひとすまめ
給へる也
弄 以楽待情事也
琵琶ハ指弄と絃音の事をいひ
箋 笑よおりつゝ琴をはむしる
おりつね琴をやつるへんとて
耳をとるにあらすや
河 如聴仙楽耳暫明 此也 秘 弄 箋同

ふみつきの中は七夕は
(河)秋部中二結し
(花)夕暮朝しみ空のほとよとしませ
まるハ文かりひゝせてそ御つせ
紅くとのんし
(秘)夕暮朝まで書れ以中すれとおに
としても文の以ての稀かりてそ
つきりく書れとし　義
柏木より女二宮つきりくさとき

うんとし中のとみ中といふらんと
てし　見河海
ちおてもせむし結びれ
(秘)用意有るさ汝し
月さしそくかつきさえかりて
稀ならん鳫のもつらとられ
ねらふ山しくさし結もしかし
(河)白雲よきねらふしとふ鳫の
みすさくみゆる秋乃来の月

秋風につらをみたれぬかりかねは
こゝろにくるともかへるさらん
秘 鴈不乱行之心也 弄
花 女二字ハ独鈷の时分すれハくるし
箋 さらに山しく落葉の色ともいひやる
夕暮の色
何のことにいとふのみ
花 此息来ハひとつの心 閑
秘 私にいとゆきさ給ひて折ふしの感よ

多くもして第二を
箋 何れとは私注ハ其の色をよまと
しく〳〵いふさし
私曰第女二字也ひとつのよ人見へさる
見ゆる夕暮也とおりもそてこそなきと
有るも女二字とみえしなり
ひとつとりよけて
夕暮に私注もとはみるのあとへかり
よ続たれて地乃まし給えてひとつと

ことさすかなり
はしかまんとのかに　河　想夫恋平調
花
夕霧は想夫恋をひきてやさしかのに
詞しいひをよひかけるとは女二宮
の心を爰にとりなしてとこせかに
なくやとてといふの曲とおもひしと
おもしろくりしやとくらふへなを
てとひらりてひきやめたとし
秘
夕霧ひとく浮しかなと

箋
想夫恋又相府蓮記せり
柏木をこふる心面白し
おもひとよひかるなるも
秘
夕霧早くりの約弄
箋
まとおもりなとり事とあるつす
とみ事ゝするい柏木れ事なる
我身よりけしる様やとしゝて
なきへとこふの楽そてかへしま
とおもりかよつまてし

関 このごろ女二ぜんの中と雅言し
うけうるいかなるとき 仕義ニうゝ
ゝ
ゝ
ゝ
異 相手ぜんの事とさひて恋ま意
ゝ
ゝ
ゝ
関 想ま意いかなるとき海りしく
ゝ
秘 ゝ
ゝ
ゝ

異 相手ぜんのゝ
私ゝゝとゝ
ゝ
ゝ

秘ケ音ハ変しいとねらつかまつる
てとくらへ行ねと
弁女二変ハ指事のまつりのひて
ひさ行ねすくいとねらつかまつる
とくらへてさいくまつる
人よりくらへさいくまつる
引弁ハよりて下行ある
箏とくにいてい琴をとくらへ
すまつりさとれいとねらつる

まさるハんふうきのいろとこと
きて来つることと
秘ハのすぐつることし
箏とハ弓をとくらへ
花女二変ハ琴とひさて変ハ意乃
来つることと節つけすること
箏琴とくらへ
地歌琴ハ琴のあらつれとくらへと
とくらへあるえらひける

兒 女二ようなることの好きたちの
かりそめなることにつけてもさねとし
異 大うちの時にあはれの感しうちとも
ともりあるよ言はいていかなるあ
らんいとねとやうちとりて
いうしとし
秘 大うちの時にあはれと感してうく楽はまま
つうちともらくうちあるのいうとと
せてうはは異まは同

異 ふうき東はあわれいはさ出
ちうは屠うのうちさしさ秘はを
は時にはの感
無ちあはれいうは体あし仏はやうちさ
うれとも初はうのうられねとし
ふうきうの仏りて 秘 想は意事ク雪
の仏はかてはうて
兒 これも想は意はうし
私和琴をいは指はかてうまり琴

とゝりそれとゝきゝの九しあ
てとゝゝん
ゝ紙ゝ書きて
秘 夕音九し
すゝゝゝゝとゝゝ
秘 夕音の紙
義 これゝゝゝゝ九流めき
ゝるとし
私ゝゝゝゝゝ出とゝ和歌九思と夕

音のひゝゝ事ゝ
むゝゝ九ゝゝめゝと
元 破古集つ書九ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝし
秘 榊九事 舞
このゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
義 夕音のゝゝて来ゝ時ゝと舞の
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

四石巻ものたえてこと
ひきたらぬものも
これも琴をうけていとん薬師の事
をも聞かなるとそうらうらんと
ことひの出すさまの人ゆゑ法
人ゆゑ　ここゆゑとは女二宮の出琴
もなほしうし法へうし事とてを
ゆゑ　ゆゑ　ととてとらのさてり
音の初なり

和琴
草子地　薬師いとすさましし
さとさ面くゆゑ法とを初とをもち
と音の初られさに御すさましし
さも人ゆゑ法とをもとをもとを地のと
うりうを

琴
出息面の初　御関ク音の初
と音の面さに御ク音の極も人ゆ
ゆと法とをもとを出ゆ
とをとを

私云人ゆゑと

有る花名なれども夕音の羽ものと
とゝめてし　玉乃をとゝいろれる
琴の緒りていへる　みゝ花を
ゝも上面に朝ゆ遠落してと東
の面白さに夕音のそゝりてみく
に物の美も人ゆゆすつきとゆすし
張よりゝゝりて寄そけても
夕音にひゝ絶るひの絶せん
絶もゝゝゝとし　時い意よりあゝに
此常に物る絶よりそつきねとゝん
とて此とゝりあとつゝ表
望畢
私云花の後に義也　愚案ゝるゝち
ゝゝゝゝとゝ面ゝひゝそて
も此絶人也ゝ迷るゝゝと夕音の
人い此意面に此云よりのゝき
ゝゝゝゝ為ゝれもゝゝゝゝて
ゝとし　以下畢花の後義也ゝる

（さん
ここにてとうぎ
ここにてとうぎ
秘 ク音は初れあり
ここにて
并 いろ（かつらありひまうれあり
ク音の初
私は脇方より并前の役する方より
ないは鼓方の初（義いかようにても
ありしは
何 うこの事にてこの所にてうきて
ありしはいかなるものにてやせん
秘 引立用之脇方にてこの所脇のこと
にて心の役は有りてこれをうけてあり
こうなるもきこれあるとき
并 うこの事にてこうよりれ
ありし事にて
つとあり（とし

私共も先祖のとし 法名秘密の
義和遠ゐて 先祖の位と用ひ 御
引立よ及ひ申さし
ゐとてゐる筆とて
別りとてゐ 秘 ゐたてゐる
し 花
こ遠ゐんまとて 秘 ゐ
ゐ遠一所の和尚より 法華
ゐ義ゐて作ゐんとゐると
ゐとゐけゐ
法華経第十四第十五の法
ゐ也 陽成院より伝ゐ
てきとゐ
ゐ似合ねゐ
のゐて
花 向秀遇山陽四居思旧賦
第作思旧賦
ゐ家ゐ

蓮生法師とぶらひけるあるひて
なりけり
はるさめのそらうらんこと忘るな
白の菊法師の方なるはるさめの所よ
あるそふつきとらんとしきりの所
そらん
秘 みさき法師ありあるひて菊の下忘
のせんとさうあるかりさき 弁業
月つきかりね酒分
秘 はるさめの下忘とうやとあれのまなつき
てふあるね酒分とかりあ者ものもて
菊を酒分してまりつる所
秘 はるさめの下忘とのあれのかり酒さて酒
分とかりかりあるとうあるかもも
為とし 業弁
ちちもれ分ようへて
秘 柏木の秘蔵せしあるとし
業 前法和尚ようり尉してこれもけ

あと云

れんぐものかこうつい

坂東(范)つ潜のひしきうし

けい節(業)い笠九音の手際とのこうく

吹いうこと事いうこと相のひとと

あもりんくなつこうてうと

節(業)とこう吹て孤九ふくるけ節

とお伝しうあこうとひしし

こうんしこうてこうこうこう

盤渉調　ふこうこうこうい盤渉九相ろ

うくくし

むこうと無くひとつとこうこうこうつこゆ

これ伝こう芸いゆこ

もとうつこうこい琴こうくこうこうこうこ

於くいむこうし東つ潜九節九言こう

ひこうくこうらもんまはゆしこと

秘琴とひこうこ事いゆこうこれ伝

以節比物に云へりとなり
相求の節ひしひしとゆとも
相求と是をよりて和野ひさし
事いはるされば以節とつくへし
ものとも
露之けさむしてこの音よりて夜の
秋ちうちうねむしの鳴るる
此恩所に寄て 秋節と出るして
ものかなしハ重月も寄とのせのうり義

虫の鳴りて節比者とせすして
八雲に物ものひうまれ
文選第賦云 蜂聚蟻閑衆音猥積
過ノ音
ものいとにうねとしる
鳴て鳴て 秋
擬第一声天地秋
相求事とむしのなく成ものとも
秘
相求比所の音声い出せしとれ
ものとも

第六中の元屋すると云へと
くゝ鳴とゝ[illegible]ん[illegible]と言て盡せね
いつ[illegible]音[illegible]我[illegible]ものとゝ
国史云仁明天皇嘉和元年正月辛
未内宴於仁壽殿是夕初授正六
位上大戸首清上外従五位下清上
能吹横笛故預此恩焉
今案横笛二字の出[illegible]しく
[illegible]第[illegible]称[illegible]と

[illegible]
[illegible]
夕音[illegible]嘉[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

[illegible]や　催馬楽呂歌
我とうたひつるかな
異　見河海いりと我
私云　と云并に唐の海ゆれ
いりと我とうたひつるかな　同
義　少雪と云ぬに唐とも
下に九の義ふんこ
こよひの月とうたねさめも
異　星とうたひ橋
秘　星とうたひ橋しと云さとと
いひてい慢うこさこ
こしこしこ橋しこ
秘　みこうわうねこ
かこ弟に月よこ
秘　異　義　河の引言と用
伝　かここうかこ
移てうひこ
少しのひのよ
義　少こねやこ

[illegible]
[illegible]
[illegible]
一条文也
[illegible]
[illegible]
[illegible]

もありとも

大ぐの世をつけてもとゝ世界に

いひかしこき事い曽てなれて

なき事いなきあしきれい高等の

世のこらすくまねと少及こゝかを

そこ有りんとこゝ

うゝ世中に

雲の層と少雲との中し

おこりなひひの人なる

少雲に雲に成たるこの足つるかに

なれ人の別のなれなきこゝりて雲

井層のおこりえこせるる事

有ること

なひひなき事なるかケ極所

きとも雲ぬ層に有る中しこゝ事と

えこしの人なる

とこゝ移りて行人なる

少雲に雲

角ばったる
柳葉病中対面のさま
美れうしみる
夕雪れ美心
ふるふる
秘
夕雪れ九
能の形とうてと美よりて
美中ニ謡ハ
能作ハ吹ける用のとうい来乃也
うたさ好ったる
秘
美中ニ謡ハ
美中ニ謡ハ
美中ニ謡ハ
美中ニ謡ハ
美中ニ謡ハ
美中ニ謡ハ
美中ニ謡ハ
秘
美中柳葉れ
用よったるあるはうかたる
つ作ったる
秘
用とれ見して吹ゆしまる用と
うたい音律いまる弟れ初ま
て吹作ったる
能のたくうは

[illegible]と思ふ事よつて[illegible]
来のようなる[illegible]の方へ[illegible]
次第[illegible]
[illegible]花鳥より女二人事とあり
[illegible]

秘
[illegible]花鳥女二人の事[illegible]
義
[illegible]
[illegible]

地の[illegible]と義[illegible]
とあり
[illegible]
[illegible]
[illegible]

不麗而吐

うへもれとるみつ

雲井の屠也

見てたてさうして

髮と再毋たてさうるやしらやさ

さ海し雲井の屠秘

いとすくてて

雲井屠し

はちわいとうるうると

乳のいてさ海し秘

うち海さうちうしてて

散米北事し

子細の事し

大嘗宮のもわり事し

うあ中しあるはてさ海れ

雲井の屠の紀

秘

い海わうしさはわうさ海北

為米北事とたてさ海

ちうしのうるし

うちうちして

夕雲れさぬし

あやしのわが身のたぐひや

夕雲の初し

いとをかしくあとてそ

雲れあやうきかぎりあり

ことことと嘆しる色によりて

いそのひ称

秘

雲井の唐初し

むさとしらる称とやいとをかれと

もさすがにたちてうれすて

海とにこの君をつてもしらう

（万葉）

頻

まことにそれなりうちひさく

稀

稀れ君よ来りしよりて

何とすくおそれすて

人のそろそろめて

髪

人れ稀をとそあるあつる人のちなを

あり き事 行ひ
さしてこれ い女の方より出れ侍る
また 指南の為 有りたんと
なのとりのとりがよ
秘 法華の一巻より外 ほかに
をさをさにどどくくし
秘 指南 葬 は 有りしや 法人の 葬 有
みれてし
集 とどこ

行 ちらめい 閑暇の 時分也 法華一巻
七 処 是 経文
貴之 集之 世中 仏 ありてあ
常 ひとらを 行 きれい 法之 忘 行
仲 は 行 とう ふ ふ
あひ とに 病 とり ありて
むし くう よ
な む て ふ
あ う う の 世 ふ

舞せんとありしかども世ねりて
うせよもれいきておとろかすかな
わりれうてものとうとうの処
しまくらくてとさるを鋼経さ
せて河原にてやうやうとて
みのうへ流よせれ寺ふる
極楽寺にして後後の寺うへ
秘仏大日方の寺うへ極楽寺な
とに所々に方のうへ寺ふるあり

きちまれしりたけのうちる
秘仏
僧よ経せんよ為とや
鋼経の布経よりと之とも名れ
極楽
せんの物ありてつくりたる
あるれいそれも遍照よりなまし
ととし

元
康保四年七月村上天皇六七聖忌小
野宮故俊訊誦和琴横笛ホ為衆
僧布施菅三位訊誦草云有一龍笛

蓋希代之名物也 之し

六条院より 多賀源氏物語

女御の御ものよ

明石女御也 并

之宮たちつりて

白玉也

之宮の白玉の事し女御に見せ給へ

まいらせ

こゝろとゝのへ給へて

紫上也

之宮白玉蓮葉に女一宮と玉之宮と

相ゝ給ふ

ゝ多蓮葉上に花たちの蓮葉の

大海にて

之宮大将と

玉ひてのゝ御ふて 并

玉いてこゝろとゝのへ給へ

之宮に我とのゝ

ものゝ一つをあらせ

花
あるこゝハ道さまなれぬ方とゝ思
西尉よりまゐらせ
れたる
れたる
ゆ
ゆ
ゆ

まうかのくさん
我と義うのかいくさん々音の無
くるのうそとしてのしあさなくさ
秘
秘
大海のうとくるのんねやうのかくさん
とも 異
私義此義なり秘異の義也
こうのこと
秘
明石の女御此方へうそれさと

二文字のうち君とひとつる
河
二文字い今上此る蛙蛤巻より或ハて
義君い莫大得
況
此我ら君いうりる此事と入道の義
此方ハ二文字とおそひのうし
異
六条院ハうつる此方紫上南のうち殿
女三宮其中の殿の殿の明石女御
の此方ハうそれさ南し秘
とうの中ハうそ

花

大納言をとりてさまつらせてきの
ものうとましくてまうのぼる
わう大納言とやとて
白女の我大納言のもとへ
源中将の美濃路
院をはなれて
おりやけの山ちくさ海りうと
迦陵大納言 迦陵の彼官をれい
うとうとして 海方とうつる
秘 おりしろうさ海 幻の時まと

いとうとうくるる
秘 ふるこ 相更衣事
ちくまうとうとれて
同出 入道の河合うと 相帝の
陪事
ちの君とまりぬる
文安ハう世ぬれと源氏君くて出
くとれハ行光ありとものさうとう
女ハんくく

滅ぼ女ハ男ぶりもさかひられて
たりけりとぞ申すなり
めのとの人ぶとて申すなり
秘源氏物語
秘源のことをば申すなり
ものもまめやかにおぼえられと
義経ことにそ申ハあるやうにうけたれと
さるものとぞ申すなり明石と北事
分のありさまをば申す

秘明石と北の事

我分ハ申すなり
生涯の程姓のやうにうけたれ
程くらべ申すなり
かにつきたり
むあるハ北とも大ぶんなるゆへ
まれかの程姓の人ぶんまで
さとぞ申すなり

[illegible]
明石と共二人のおやなり
ち君なきを思ひつゝ
明石の入道おもりをもたれ
ものしてあつらへ
[illegible]
義岡為業上洛山事へ
義岡住吉社に寄宿退治の神[illegible]
[illegible]社の[illegible]福奥鮮鶴翼の陣[illegible]

表[illegible]トソ山[illegible]に申サしと
人[illegible]
明石入道[illegible]
[illegible]
秘
源氏廿六歳なり 年
[illegible]
義岡須磨の若木[illegible]
岡山[illegible]より須磨の浦[illegible]
[illegible]

松前より人本ともとりあつめ
本ともとりあつめ
しかつの事ありそれて
日のくつれくちらはるうへ
二月廿日あまり
紗
去年のはしめ
義岡殿ハ京をおそれ
義岡殿ハ京をのの事
義岡京をいてハ去三月のこと
されとこのそれのそに第
相意ものの時の節安堵ありし
出ぬれハ二月ハそ時ふとお
ものはしめ
院のはしめ
相出ぬ時ハ法院の時ふれ後に
院よりの人へ
紗
ちはしめの
時光董はまをしめ時

[illegible]

[illegible]

秘

[illegible]

義国[illegible]

[illegible]

[illegible]

仍橘[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]三位中将
義冬養上洛後致仕左近大将
いまハ宰相
とハ宰相中将[illegible]
[illegible]
三位中ハ源と他よりの聟
[illegible]
のもとへ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]時代の[illegible]
[illegible]
[illegible]
義冬[illegible]大臣の[illegible]ハ君臣
[illegible]中将の[illegible]
[illegible]ハ朋友[illegible]信あ[illegible]尤奇特[illegible]
[illegible]信近義[illegible]

ひ[illegible]ものうらもとをあらてあ[illegible]
ハ[illegible]ハ[illegible]近[illegible]さるり
うらみうらり
宰相の君[illegible]
ひとつ海を
河
うれうさもうらもとんハひとつ
まれぬものハ[illegible]
秘
川[illegible]同　要[illegible]一[illegible]　[illegible]同
義同　[illegible]川[illegible]

私[illegible]
又[illegible]
[illegible]
秘
[illegible]の御
義同[illegible]
[illegible]ハ[illegible]今[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

私百首とゝ題別のとゝ
の抜出すゝ
竹あるゝ紀ゝとして石ゝ松のゝら
河 立架三同彩草堂石階松柱竹編垣
白樂天香炉峯下新ト山居草堂
秘 立架ゝゝゝめゝゝとゝゝけゝゝ
義同同
私色ハ源の作ゝ色ひのゝ色
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

簾おゝて奇簾ゝゝ簾ゝゝ作也
山ゝゝゝ
花ゝゝ源の衣裳の事ゝゝ
ゆゝゝ文ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
秘 源の衣裳ゝ花ゝゝゝゝ
む ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

私詞の右遠あり同色をく
ゆゑ文武うちあとあめうあき
といへんとそやうにもて先この文
いてて後衣喜の名とあうせりゆゑ
し文ハうすの紙のあと青純ハ花田に
あとけのまゝ物文一ゆゑ文
北うちるあとありうすきあれ
黄ゆうとこにれう紙のあり
三吾清約請棟梁御衣服奏議云紙

法衣袈裟黄来及史文者不制限ゝ黄う
ちゆうとハ紫ゆゑ河海ゆ黄衣ノ純
文とひうれうあやまり作ゝ又一
ゆあとあひれうとあうあ紙
ありうとうとあとうとせうとう
いうりゆりんあ物ゝ
ゆゑ文ハうとあ紙とうとうゆハ黄
るうあまうれゆとあの文ゆゑ
うとあとハゆあとあひハ花田ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

或云經云彈碁兩人対向白黒碁各六枚
先列碁相尚更先彈也碁局以石為之
古今詩話曰求食 彈碁有譜一卷皆當賢所為碁局方二尺
中心高如
覆盆碁顛為小壺口角微起
李商隱詩云玉作彈碁局中心最石平
謂其中高也道士席謙實人彈碁
義同彈碁ハ北世ニハ
私碁ニ云ハ碁ハ
双六の盤ニ石をもりみれつまく
北ものしりしるもの
碁法ものもつ彩色物ハ百
つけさるもの中に
奥ありしと
あるものあるものしてしらつもの
求食 万 河 いろ物ハいろ人しらぬ之或
海澤物能同分物人北ハいれ物

とうとあうとり云

秘

あまたのうきたてる物と又海物と

義同海の物とつゝやとわ字

和物

貝のたぐひ

同也貝の事又海中物也

或抜日女紀に海物(カイツモノ)蜯廣物(ハタノヒロモノ)蜯狭物(ハタノセバモノ)孫物

等あり

私云海物(カイツモノ)ハ則貝の事也蜯廣物(ハタノヒロモノ)ハ

にしノ大ナル異と蜯(ハタノ)ハにしノ蜯狭物(ハタノセバモノ)ハ

にしノ小キ異と孫物ハ孫にアル異か

九稼貝や海藻也と

めしてそ作んを

うつつ物もて海人ともめしては

らんもてるもり

さもゝ〳〵やとけ白紀

私毋の中波也庶あて老に乞

あまの志ほまいたるもの也と云

うとりんと云

そこなくさんつも
和
わまれさうり
義同わまの物いみ神を中なるひと
ゆへよんしてこそ
そこなくさうり
たまはるこそ物うれしき
私門あるへきこれをうして法師
ふ年一同云こ年こ世中いとそそくく
てもおもひこそやさしき

一

おもれは法師とひとりとこそ寄こ
さもくやきけの紀男れうれ人事
とをおもひて今はそれ人名れやを
今日紀人のゆくえ思い海や寄れ君
たまの山海人もおもひこそ都
しまの人大きうこそや
或物あまれ物しく物ひてさんの
こうりはこそれはあるこそ
たまはるかうりはるこそ

我は月つるの
はるとなりつけ
源や宰相君の海人を物うき
いそうひあり
物うけなふとひいそうひあり
なにはの海人よ孫のあり河
みやりるくるふて
みやりるいみ
秘 金やるとるへ秘なり

或説 金うるまとなるこ
らしくるまり
あ宰相君
なるけう月
るへ

い秘ありいて
琴 秘なるへ
一 義風稲へやの家の沙金
さまおりうへ
中玉内くさの新るをあるへ
秘 ひさ内内ひ稲ひ
くさとうれくひ
河 婆羅河天馬食敵香稲 有戸 琵琶邪
あるのるとうひて

花馬井ハ信濃馬乗さ紀ゝ志ゝ侍り
馬にいるゝと上にたゝれハ今ゝ
りゝ北ゝとゝ侍りより
秘義同同今ゝ
ゝ君の何ゝも
義同夕暮の行ゝ
ゝ中ゝの
ゝ北ゝ
養の又左夫
夕暮ゝ

くゝみ侍ゝ
ゝゝ侍り
源の中ゝ
侍ゝ
秘
弟子の地ゝ
義同源ゝ中
侍ゝ
ゝゝ
ゝ侍り

他人ハ[illegible]
さいなむ[illegible]
義同前ノ罷[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ君臣の[illegible]
遥[illegible]
[illegible]
中[illegible]
[illegible]
[illegible]

醉燕滋灑書畫裏　乐天

白乐天の江州へ左遷せられ時三月
[illegible]に実陵といふ[illegible]て元
微之[illegible]時作られる詩此句也
それをいつ[illegible]三位中将よ源の[illegible]
時よおのしたる[illegible]
[illegible]
顔の[illegible]
[illegible]

海をたゝくまさしつゝ

樂天の詩河海とゝもに憑皆成ハ

元稹の元和十年あひさとんとしてもち

宣家に奇し暑く

河

十一月三月すゝ別微く於澧上

十四年三月十一日遇微之於峽中停

舟夷陵之宿而別言不盡者詩終之

七言十四句

一別五年方見面語到天明竟不眠生

涯雲寄蒼波上圓終拗白日色

往事眇茫都如夢四海冬榮寒飯泉

醉坐淚灑春盃裡此苦支頤曉燭前

樂天偏而元稹に行あひて此れの

詩句くそれと今の事和中ゐ此れ面

よりあひくそれて須せられるり

松云此二首ノ詩ノ面けをとりは

てゝ此りもくにもくまゝ

とゝあり是ハ語到天明竟不眠と

と又次広の国北条れい生流れ宮
蒼波とも呼ばれ又みなとあり
江とあり芦も吟者文頭暁焼おと
あり時節又まさてあひ北ら
なひ海そくるとひまなそ
ろ[illegible]ま編一夕ぶ[illegible]
あれあ[illegible]
ほとの人
芦ハ寧和中ものとものの人ハ

よ[illegible]
秘
[illegible]北お[illegible]
義同寧和の作北人と源さ[illegible]
ふ人[illegible]
[illegible]
帰[illegible]
源
古[illegible]いまの[illegible]ゆさそ[illegible]
[illegible]山[illegible]きハ[illegible]
義少義ハあ[illegible]

我為迂客汝来賓芝是蕭々桜漂身
初花思帝帰去日我知何歳汝明去芝
菅家来有と安て作り侍つる時に
のハ物有なれハ人うらやみ来有れ
明年物へさきへうらやましられまし
只今ゝ有我中てくるあるハうら
なり　我安て芝をひろう
私只今宰相中将の御とうてうら
なり帰有の古里へおもひくらして

源のうらやみつる也
たちいてんいちせて
古里へ帰有もいとまれ
あるとしに有のさこそ花ちりけれ
花の散ゝ今ちやもとうん
宰相　三位中将の詠ハ秋の有さやに見ゆ
此時のうたに花しをれつゝ
ゝや有我ちるにちりてゝちり
爪の面ハ有しんの花つゝ

左宰相中将

冷泉の黄皆秋のやうに位やうに即
席の事にはしてやうに
そしもあるべし
秋
うりうりと有るに世にしりうの花の
有るべしに今の花に香りて
文よ秋へうりうりと
神物語と有るよりて
にうりうりてうりうり
さうさ秋のつ

宰相中将のみやけ
あるに君くうるに花ぬきうり
義定見るうると謝る源の詞り
くうりうりて
いろに
ぬきにありてやみゆいう家
くやくいうりんあゆめくうこま
月
ワうるる花ぬ足弱きあるは
君はこすすもとのまいるけ
ゆうりうおはされぬ今れと

いるけ
いるあり

源八方迄の人馬れいのごとくくだ
りうんと

せいわらていうくあるへきれい
胡馬嘶北風越鳥巢南枝詩ハ胡
国の馬ハ北の風にあるれい四里ハ志
ていくゆうこと

胡馬嘶北風故ハ北風ハ胡馬ハ
義国越ハ南国ハ鳥ハ南枝ハ巣ハ
くうこと胡ハ北ハ

北の馬ハ北風ハ古ハ古ハ源の人
ハ故ハ故ハ又馬ハ越ハ鳥ハ
ありかれいくの馬
ていありけるハ馬
後馬ハ
うくハ志ハ行ハて
義国祇見ハ

北山笛ハ中ハの源ハ北ハ北の
しき笛ハ北ハ

とあれハ源より馬と笛と送り
給ふ如何
うたゝとまつ
義経ハ乗ハ乗まし　同じ日
乗にとあれハ馬ハ源より北条殿
笛ハ中務より北条殿へ一ツ
うり給ふ義可然
日やうにさあらて
終夜酒うまんあつて日のさし
あらまし為紙ちしをはまれ
給ふさ申ちり
今とうり給ふさ申ちと
又ハいと中くとうもり源あつる別
ちうへ
川又ちいめん
秘
源の初
義経ハ乗より寄和の初ちいめんを
ハ川ちあれちも又ちてハちて紙

[illegible]

秘　三位中将殿

只の河又ちつけ

て三位の河とかな

源　[illegible]

秋　[illegible]

花　三位中将とうけてしみ

[illegible]

秘　中将の[illegible]道

[illegible]

秘　[illegible]三位中将[illegible]

[illegible]

[illegible]

くたり人にまれること聖廟なり
さしるしき事とこそ
義朝源の頼朝罪の実なれ共
さらにもこれをもてさしもそや
ひとしかりけるなり
かくなりぬる人の若君に
義経源罪事と聖廟なり宰府
にて薨しぬるなり
尊
若家の事におわすれ又大ことも

新式さうひを又ひとつ
安実の分なれはさうとこそ聖
廟なり帰京はなりしなり
新とこそひ新とこそ切りなと
の源氏頼

延寿丸
頼朝なる北条殿に
はさうなしこと
同
頼朝なる北条殿
花
頼朝なる北条殿といの頼

[illegible]
[illegible]
[illegible]
氏[illegible]
[illegible]
秘
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

秘事 義史河ノ引ヲ[illegible]

[illegible]

[illegible]

蘭葉招魂續魄祓除不祥 韓子

成都記曰三月三日遠近祈福於龍橋命曰蚕市

王羲之三月三日蘭亭序云永和年歳在癸丑暮春之初會山陰之蘭亭修禊事也 三月尽

白樂天開成二年三月三日洛濵宴スル詩十二韻在之

頌注同之
或抜モ此声ヘ
ぜんしやう 二光

せんしやう 秘
同之此声ヘ

河

帳障　有蓋圖松ヘ　謂高松帳漆
堂上立帳障堂下引慢又堂下嶽漆
事ヨリせんさうと紀せんしやう
ちうしんへ

秘

新儀式曰内宴日妓樂出自綾綺
殿帳障南着座
帳障ハ幕のやうなる物ヘ　俗名まハ
せんしやうとも云あり只せ
やうとしんへ

幕

一云帳障トカク幕ノヤウナル物ニタカキ松
ナト結ヒカキテ障ニシヘテ引ヘ
皮ヒ出せやうとしんなり
義皮ヒせやうとしんヘ慢幕ノやう
なるものなり

河

ものゆゑよりしんなる陰陽師
道満法師ハ居住播磨国ニ山ヲ
山ヲ掘池ヲ堀ハ皆ヒんなりしとなり
伊勢物語にハ切ん山しとも云

秒

若ハ國に法湯師醫師法をうれば
つを河海より道滿法師此事法ひとり
を義よりなさうれ　義経同

河

おとうとさ人てを

人形

義経おとうとを紀ハ等分とうじ
をて物と等身とハその人形分也
うけよひとうきをり
をうとれて

義経源の流罪よりてうれうと
をうとをいつよつをそれ
源

おとうとを大海のをにをうれ来て
一をうをやハ物はうを形ちを
弄

一をうをやうを人形とをうり
秒

をうハ身也をうハ人形のをうとを
私云文字をうをうをうを又ハをのをや
をうをいの文字をいハふをうり
いをうをうを大海也いつをにをうれ来

[illegible]又大[illegible]ものくるに[illegible]いつる後の
初[illegible]あり
[illegible]
晴[illegible]出[illegible]ひそいまいくとくとく
源の氏[illegible]の[illegible]
源
岡海[illegible]
[illegible]川神[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

寺
八百万八神[illegible]に[illegible]
或[illegible]八百万神八世[illegible]にありと
河
河[illegible]の神
同事[illegible]日[illegible]皇[illegible]天[illegible]八百万神達 日本紀
[illegible]天八端河[illegible]川原八百万神
[illegible]
八百[illegible]代の神[illegible]
中[illegible]羅波[illegible]大津皇子[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

義安御[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

暴風卒起屢游惡畜王暴虎不
修若事　金光明経

尚書曰武王既喪管叔及甚熊羆乃
流言於國曰公將弗利於孺子周公乃
告二公曰我之弗辟我無以告我先王
周公居東二年則罪人斯得　周公告二公遂東征之故
二年之中罪人此得　于後公乃為詩以貽王名之曰
鴟鴞王亦未敢誚公秋熟未穫天

大雷電以風（二年秋八月以咸之故有風雷之異）
禾則盡偃大木斯拔邦人大恐（凡災害乃邦人皆大恐）壬寅大史書弁以啓金縢之書乃
得周公所身以為功代武王之說二公
及王乃同諸史與百執事對曰信然
命我勿敢言王執書以泣曰其勿穆卜
金縢篇

漢書曰君寡恒風若（師古曰凡言恒者謂所行者矣）
道則寒暑風雨不時恒久

海北却ちかいかたをたちうしんやう
ゑ光みちて（秘）
波の白き紙いふ　年同　年花色雷光
道成集　安院の内ゆきて雪のちる
波て作りしたちれとうんてと
却ひ世ことわれい
年ことに色ものと知るう
とこめつしうさまゆきて
定家　明月花云雨脚融地雷

光孝公

神なりひめくあらうんとして
雷電ひいめきさわぐ
なる神ハうて身ひとのうして
と云句に宗牧
あるもうなしきあのいふしへ
たうり来て

秘 やうへうたうり来て
ゆうきつてそこあれ

秘 ものつれ比風ハうれて催してたに
もありしなり是ハ御よ大風のなとうを
義同じ風雨物のきとうなる必ハ何
うやうん今ものうきうさくものんあ
まこ所なあり
君ハのうやうに
源の神へ

秘 形のちうなうへ
秘 比風必ハ形とうたうるうへ

たりとぞいふなるべん

花大流 仕イ
大津皇子さてこそ浜風のふきて

海にいるものの入ていとおそろく

風もみなれて志んしんとゆ

くいさごをなりなりくくふれ

なりなれぬなり 琴

・

なのこゑもみなる

・

義岡源九義経ハ狩人

なりなり

秘

・

なりなりのゆめ 花月流あり

花

あれハ義経と出見ると源氏君こそ人

て弁慶の豊玉姫とあらせて

まつりとあり八道の女よたと

らんとなりこと

義経と義よりあらしめ

源のんよ弁慶と事こそ恐怖

行基菩薩の御ものがたり申つき場相之
私氏南義物語変化へ
行
義史と出見る物語とうしなひてまこと
のごとくうり易行をうと称神新宮
熱絶世をうりとあらてまりてむとめ
豊玉姫よりあくせてわふるまこと年
をうりてまつりしへ見年紀みをうり
又日代武尊東夷と征しに行財相撰
国をうり上総国より海行しに称神め
てをうとをうりをそまつんをうれ
を沿風あくして出身志つまん
をうに半稿姫みを紀法命よくく
まてへ海してうせ行をうり号稿姫
と志のひ行てと世国雄居坂をて東
方をうてあつまやこの行をうより
東とあつまをいつと吾つまをいつん
吾嬬をうをてあ
元字 紀文書
つまをしをう東ハ

天平勝宝元年　墨書

おもろさて

源氏物語

さゝなみ海のゆたけさ

さゝなみ長山出見るものやうに

源よめてゝそもきりてゝやうに浦風の

さゝなみもあるやうにおもふと

秘

あのきもしらへうあるもの

あゝつのうちひとゝ出ものゝ

義定同

年奥ニ戸九分

海より内ニ神代ヨリ有ケル

住吉明神ともゝ又海神ともも

ちりのやとあひよ

八百舎　日本紀　八百重とも

さて海の中に龍王の

宮殿ヨリ出現ありし当の約

束ありて奥より来れて来り時

ときりて奥より来れて来り時

指土老いつりのさゝ神術をして

宮殿ヨリ出現ありて海中にいれをりて豊

玉姫よりわたせをりて後より干珠

満珠とをりてこれ有り

おのれ

ちりの月日ケ月ケ

ちりの月日ケ月ケ

ちりの月日ケ月ケ

なるべし

同

なるべしと同人死一動和の字此もの死
ひとり此ものとしてうきき
平清の母と妻安指貴の地位なる
夏秋い真安年齢にしてうす女
あるべき老い志ろきと指貴も年に
しりてなるべきの浅深あるべ